

—夏期大学講座内容③—

# 北海道の四季

(財)日本気象協会北海道本部 小島 修

## 春

春は低気圧や高気圧が交互に通って天気は周期的に変わることが多いのが特徴。そして、融雪期を迎えるため、雨が降ると、少ない雨量でも洪水の原因となるので注意を要する。4月から5月にかけては、優勢な移動性高気圧に覆われ、よい天気が続く。枯草などが急速に乾燥して、野火や林野火災の発生しやすい季節となる。また、気温の上昇が大きいのも春の特徴で、地域的に見ると、内陸は海岸に比べ昇温の度合いが大きい。海岸では道東の太平洋側を中心に、その度合いは小さく、春

の訪れは遅いといえそう。

根雪の終日は、例年、道南で3月中旬から下旬、その他の地方は一般に4月上旬から中旬である(図3-1)。

降雪の終日は、例年、一般に4月中旬から下旬であるが、北部からオホーツク海側では5月上旬である。札幌は4月21日、帯広25日、旭川は5月1日。

霜の終日は、例年、道南地方の海岸で4月下旬、道北や道東の内陸では遅く5月下旬である。しかし、上川や北見、十勝地方などでは年によって6

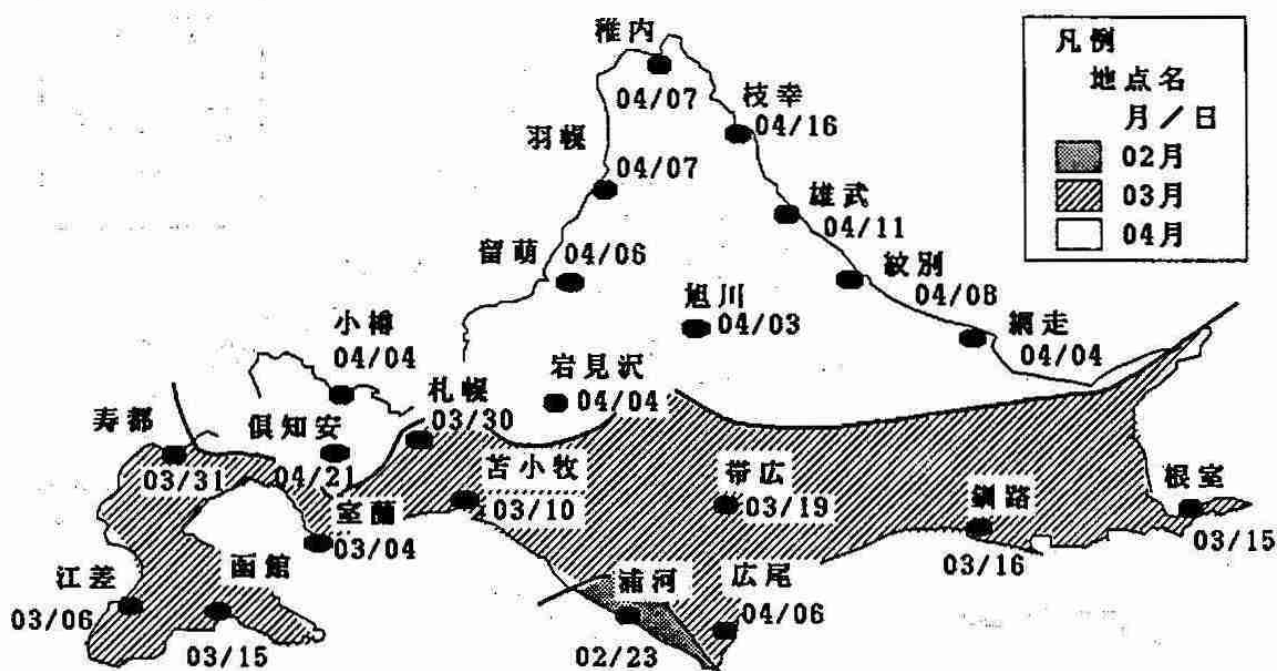


図3-1 根雪(長期積雪)の終日「平年値」

月から7月初めに霜の降りた記録がある。札幌5月3日、帯広16日、旭川18日。

桜の開花は、例年、南西部や内陸で5月上旬、道北、道東では中旬。札幌や函館5月5日、帯広8日、旭川9日。

3月

日平均気温が5日ごとに0度5分から1度前後上昇し、雪は日ごとにざらめ化が進み、中旬には5日間で5センチから10センチ融けだす。月半ば頃には大陸の高気圧は衰え、北西の季節風も弱まる。そして高気圧が移動性となって進んで来るため、天気は周期的に変わるようになり、この期間、冬と春が同居する。しかし、彼岸を過ぎると平野部では雪融けが急ピッチで進み、農村では雪消し作業が始まる。一方、流水で閉ざされていたオホーツク海沿岸では海明けとなる。

4月

平野部ではほとんど雪融けが終わり、道南からひばりが春を告げてくれる。半ばころには、早春

前線（気温5度の線、植物生育する限界温度）が北海道まで北上し、スイセンやタンポポが咲き初め、年によっては月末に早くも桜前線が道南に上陸する。

5月

ゴールデン・ウィークの期間中に南西部から桜が咲き、行楽地は花見客などで賑わう。しかし、花の咲くころは得てして「花冷え」といって寒さがぶり返し、時として霜が降り農作物に被害をもたらす。また、下旬にはライラックの花が咲きだすが、このころオホーツク海高気圧が一時、勢力を強め、低温に見舞われることがあり、この時期の低温を「リラ冷え」という。

夏

本格的に暑くなるのは7月末から8月上旬である。一般に、内陸に位置する平野部や盆地は海岸地方に比べ暑くなるが、海霧の影響を受ける太平洋側および道東の沿岸はあまり暑くならないで過

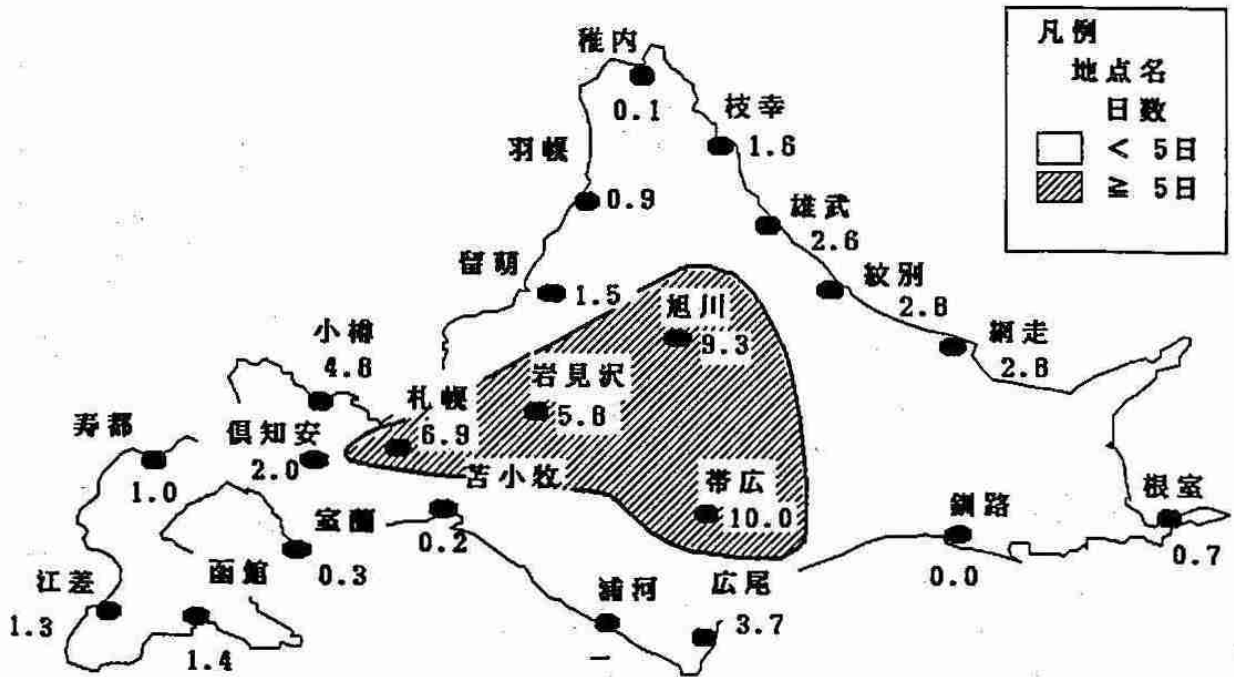


図3-2 真夏日日数「平年値」

ぎることが多い。盛夏には本州に匹敵する暑さになることがあるが、暑さを感じる期間は本州に比べて短いのが特徴である。また、北海道においては、オホーツク海高気圧と太平洋高気圧との勢力争いが夏を左右する。太平洋高気圧の発達が不十分な年は、いつまでもオホーツク海高気圧の冷涼な北東風に見舞われて冷害を起こすことになる。また、盛夏に大陸の冷たい気団(大陸性寒帯気団)が南下し、暖かい太平洋の気団(海洋性熱帯気団)との間に前線が形成されると大雨の降ることがあり、この前線に台風が重なると豪雨に見舞われ、大きな被害を受けることがある。

夏日(日最高気温25度以上)の日数は、例年、内陸地方で40日から50日を数えるが、海岸地方は少なく、多い所で20日から30日。しかし、道東の太平洋側では5日前後しかない。札幌は45.6日、釧路では5.2日。

真夏日(日最高気温30度以上)の日数は、例年、夏日と同じ出現傾向にあるが、その日数は極端に

少なく、多い所で10日前後(図3-2)。

霧の日数は、例年、道東の太平洋沿岸で多く、6月から8月の3ヶ月間で50日から60日を数える。

### 6月

すずらん、アカシヤの花が次々と咲き季節は初夏。そして、いわゆる行楽前線(日平均気温13度)や観光・ビール前線(日最高気温が20度)がやってくる。しかし、本州は梅雨に入るため、北海道では、オホーツク高気圧の影響を受けやすく、道東やオホーツク海側では、低温や曇雨天の日が現れる。この期間が長く続くと農作物の生育に影響をきたす。また、この時期、道東の太平洋側では霧に覆われることが多くなり、釧路や根室では霧笛の鳴る霧の都となる。

### 7月

上旬は、まだオホーツク海高気圧の影響を受けやすく、梅雨前線の北上などで時として大雨や集中豪雨による災害に見舞われることがある。しか

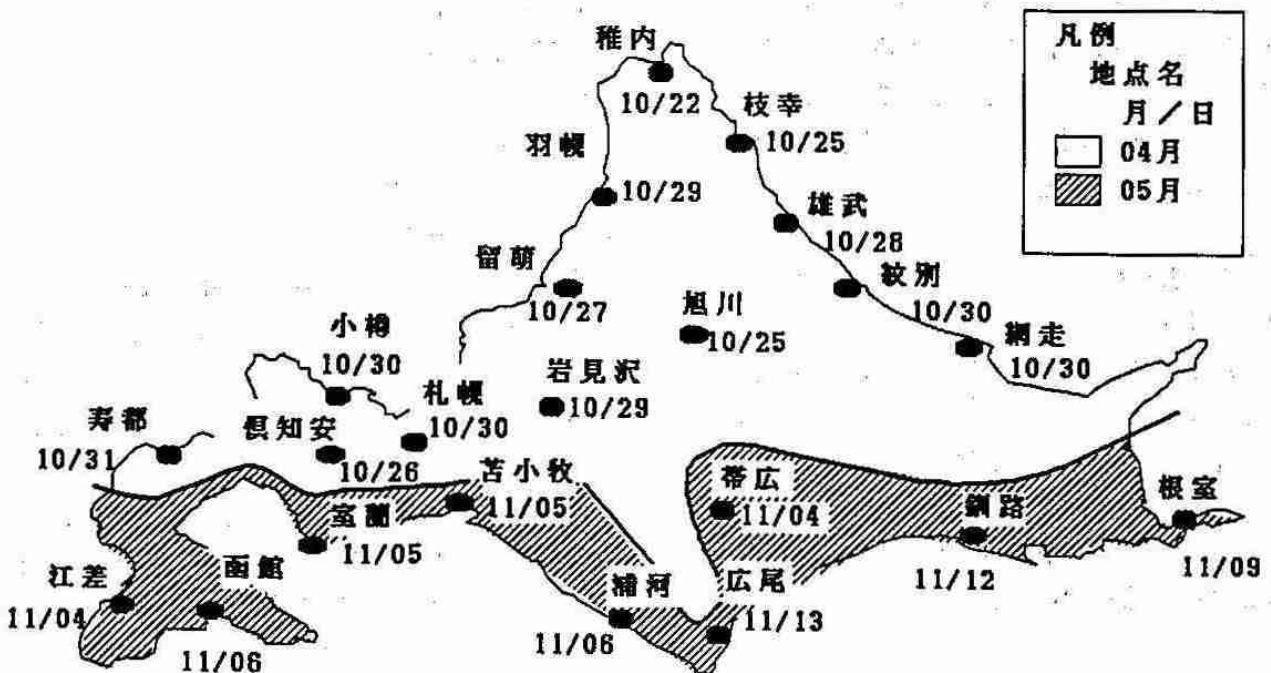


図3-3 降雪の初日「平年値」

し、下旬には太平洋高気圧に覆われ本格的に暑くなる。夏を海で楽しもうと海水浴場は人でにぎわう。海水浴に適した最低条件は、気温25度以上、水温20度以上とされている。北海道でこの条件を満たす所は、道南や西海岸で、その期間は20日から30日位である。

### 8月

上旬は、真夏の盛り。しかし、立秋を過ぎると山や高原にはそろそろ秋風が吹き、ススキの穂が顔をのぞかせ、遠く近くに聞こえる盆踊りの太鼓の音は、夏の終わりを告げる。そして、下旬には、朝夕、涼しさが漂い始め、ひと雨ごとに気温が下がって、秋が近づく。また、寒冷前線が通過する時、ひょうの降ることが多く収穫前の農作物に時として被害をもたらす。

### 秋

初秋は、全道的に雨が多い。太平洋高気圧は次第に衰え、変わって、大陸の高気圧が勢力を強める。この性質の異なる高気圧の間には、前線（秋雨前線）が形成され、北海道付近に時々停滞する。このため、雨の降るぐずついた日が目立ち、前線上を低気圧が進んでくると大雨に見舞われる。そして、この時期、台風の襲来と重なり、暴風雨をもたらす、多大な被害を生じることがある。

そして、ひと雨ごとに冷涼な秋風が吹き始め、秋晴れシーズンを迎えるが、朝夕の冷え込みも強まる。

霜の初日は、例年、内陸地方で10月上旬と早く、日本海側の海岸地方は遅く、下旬から11月上旬となる。旭川や帯広10月4日、札幌は10月10日。

降雪の初日は、例年、中部以北で10月下旬、太平洋側は11月上旬から下旬（図3-3）。

根雪の初日は、例年、北部や内陸で11月下旬、太平洋側では12月中旬から下旬、旭川11月21日、札幌29日、帯広12月9日。

### 9月

立春から数え二百十日や二百二十日は、台風の厄日。洞爺丸台風、狩野川台風、伊勢湾台風など

多大な災害をもたらした大型台風は9月に集中している。また、この時期、'静かな' 災害として早霜は無視できない。なお、下旬には山では紅葉が始まり、秋晴れシーズンとなるが、大雪山系では初雪が降り、高い山では本格的な冬を迎える。

### 10月

大陸の高気圧が移動性となって北海道を覆うと数日、晴天が続く。しかし、晴れた日の朝は冷え込み霜や氷の便りが各地から届く。このため、朝晩は暖房を使用する家庭が多くなり、下旬には、北部や西部から初雪の便りも届く。

### 11月

秋から冬に移り変わる月である。野も山も落葉が進み、やがて木枯しが吹き、季節は着実に冬に向かうが、時々「小春日和」といってぼかぼかと暖かい日が現れる。しかし、日ごとに寒さ加わり、晴れては降る雨は次第にみぞれや雪となり、下旬には道北から根雪の初日となる。

### 冬

大陸の高気圧が勢力を強め、北西の季節風が吹きやすく、日本海側では連日のように雪が降る。

しかし、太平洋側（特に十勝平野から根釧台地）では晴れる日が多くなる。これは、シベリアの寒気が日本海の上に進んで来ると、海面から水蒸気を受け暖められ、上昇気流を生じ雪雲が作られる。この雪雲は季節風に沿ってすじのように列をなし、日本海側の海岸から平野部へ、そして、山岳地帯に雪を降らせる。一方、大雪山系を越えた空気は乾燥しているため雪雲はない。また、季節風による降雪は地域によって異なり、西風では岩見沢方面、北西風は札幌付近で雪が降り続くことが多い。

道内では、宗谷地方南部（歌登）、上川地方の北部（美深）や南部（占冠）、空知地方の北部（幌加内）、羊蹄山麓などの地域で積雪が1.5から2.0メートル前後に達する。なお、大寒から立春前後に厳寒期を迎え、酷寒の地域（主に上川や空知北部）では、氷点下40度前後の観測記録がある。気象官

